

平成二十二年という新しい年を迎えました。しかし、国内外の経済情勢はますます厳しさを増し、企業は一瞬たりとも気の抜けない状態が続いています。

このような時代だからこそ、経営者は全神経を集中させて時代の荒波を上手に乗り切る策を講じなければなりません。では、荒波を味方につけるためには、経営者として日々、何を磨き高めていかなければならないのでしょうか。

「雀鬼会」を主宰し、「牌の音」で若手や後進の指導・育成に努めている桜井章一氏。昭和三十年代後半に麻雀を覚え、実業の世界に身を置かれたわら、プロの代打ちとして数々の暴力・脅しに屈せず、二十年間一度も負けることなく勝ち続けた人物です。

数々の著書を出版し、麻雀という世界でつかんだ「人としてどうあるべきか」という人生の極意を平易に記しています。その一つ『精神力』（青春出版社）の中で、「人間には体に「体温」があるように心にも「心温」がある」といい、心温を適温に保つことが大切であることを強調しています。その一文を紹介します。

欲にかられたり、恐怖心におびえていると、心温は上がったたり下がったり、乱れてしまう。私は、そんな相手の心を見逃さずに、さらに動揺させる。すると、相手は自ら崩れていく。要するに、麻雀も人生と同じように自分の心との闘いなんだよ。

(中略)自分では気がつかない心の乱れが、



心温を一定に保ち ツキを呼び込む

私には見える。それは、自然がそうであるように晴れたり、曇ったり、雨が降ったりするのと同じで、人間の心も変化を続けている。そこに気がつけば対処もできるけれども、気がつかないでいると、精神のバランスが崩れていくものだ。

その崩れは、どこからくるか。麻雀でいえばごまかそうとする心だ。安い手のふりをして八ネ満である。あるいは、引っかけ手で他人から出あがりをつま。人をダメにしてあがっているうちは絶対に強くなるはずはないんだ。必ず自分の心が動揺しツキの流れから遠ざかっていく。他人や自分をごまかしているうちはダメなんだよ。

私たちが倫理法人会で学んでいる実践哲学も、桜井氏が述べている「心」という部分を非常に大事にします。私たちの会も、この心を鍛錬しながら常に適温を保ちつつ、ツキを呼び込むコツを会得する実践道場なのです。

先手の明るい挨拶をする、約束を守る、お客様や社員・家族を大切に、早起きをする、笑顔で人と接する…など、どれも人が生きていく上で当たり前の取り組みですが、「わかっている」と「できている」とでは、長い人生において雲泥の差がついてきます。

え・栗木 映
倫理法人会という舞台で「心の経営」に真摯に取り組みながら、困難な時代を爽やかにそして生き生きと乗り切っていく訓練を継続していききたいものです。